PROCEEDINGS 08 23-35
July 2009

育児期の父親が子どもとの関係性を高める要因
―フォーカス・グループ・インタビューの質的分析―

加　藤　邦　子
（ジェンダー学際研究専攻）

【問題】

現代は、社会の変動性が急激に高まっており、大日向（2001）は、親にとっては、何を目的にどういう教育をするのが子どものために望ましいかといった展望が持ちにくく、子どもに対する期待も責任も高度で複雑になり、追い詰められやすい時代であると指摘している。しかも、児童虐待の増加、経済の低迷、格差の拡大など、緊急の対応を迫られる問題が山積している。子どもが多様な家族構成において養育され、さらに親がさまざまな育児支援を利用する機会も増えていることを考慮に入れると、あらためて母親ばかりでなく、父親による子育てについて検討することには意義があると考えられる。石井（2009）は、父親の育児参加によって子どもに人間関係の多様性を学ぶ機会を提供すること、つまり母親とは異なる大人との接触機会を生み出し、大人への親密性を増すこと、生活範囲が広がるとネットワークも拡大することにつながり、子どもの社会性を高めることに貢献するとしている。日本ではこれまで社会学、心理学において父親に関する研究が積み重ねられ、育児参加は子どもにプラスの影響があることは確かめられてきたが（中野，1992；加藤・石井・牧野・土谷，2002；Ishii-Kuntz, 2004；）、日本の長時間労働に代表される構造的要因、夫婦間の性別役割分業などの要因によって、現在のところ育児参加の大幅な増加までは至っていない。したがって、父親の育児参加を促進する感情要因について検討することによって、今後父子の関係性を高めることにつながることと考えられる。

フォーカス･グループ･インタビュー（Vaughn,Schumm,& Sinagub,1996=1999）は、対象とする人々がある特定の話題について話す内容を分析する事によって、人々がどのように感じ、行動しているのかをより深く理解できる手法である。本研究では、子どもとの関係づくりをテーマとした父親のフォーカス・グループ・インタビューを通した語りから、家庭内で子どもとの相互関係について、どのような場面で父親が何を感じているかを、主に父親自身の感情と子どもの感情の読み取りに焦点化して、質的分析によって明らかにすることを目的とする。

父親の子どもへの関与を捉える意義について、Cabrera, Tamis -LeMonda, Bradley, Hofferth, & Lamb（2000）は、従来男性がどのようにして父親になるか、父子相互作用の内容、背景にある父親の動機、促進要因、抑制要因などが明確になっておらず、政策に反映されにくかったが、子どもへの関与を明らかにすることで、有効な政策や父親を対象とした教育プログラムの開発に反映され、さらに、関与を促進すると述べている。これまでLamb, Pleck, Charnov, & Levine（1985）は、父親の子どもへの関与について3側面を提示し、engagement（直接的相互作用）とresponsibility（親としての責任）、accessibility（子どもにとってのアクセスしやすさ）という概念を導いているが、Cabrera et al.（2000）は、父親のaccessibilityは子どもに安定感を与え、情緒的な支えを提供する重要な側面であると述べており、つまり子どもとの相互性を重視した側面と捉えることができ、子どもへの関係関与性と言い換えることができる概念であろう。Amato& Rivera（1999）は、子どもの年齢、outcomeの評価などによって、Lambらの3概念が互いにどのように関連し、子どもにどんな影響を与えるのかについての研究は積み重ねられているが、必ずしも結果が一致しているわけではないことを指摘している。

たとえば、DeHart, Sroufe,&Cooper（2003）によると、2歳～3歳の子どもたちは、移動能力、コミュニケーション能力、他者の理解も高まり、自己主張も発達する一方で、良好な親子関係にあったとしても、時に親のいうことを聞かず、親の要請とは逆のことをしたがり、自分の思いを主張する。この時期の子どもはterrible twosと言われ、親は対応に手こずることが多くなるとされているが、最近の調査（ベネッセ教育研究開発センター, 2006）によると、就園前の子どもの遊び相手として最も多く選択されていたのが、友だちではなく、母親であることを示しており、日

本では子どもの近くにいるのは母親のみ、という可能性も示唆されるのである。母子が近すぎて葛藤に陥りやすい状況が生じているとしたら、子どもの社会性の発達の視点からも検討を要する問題であろう。Umberson & Gove（1989）は、特に子どもの年齢が幼いほど、親としての役割に関連して、多くの課題が求められるために、ストレスが生じ、葛藤が高まることを明らかにしている。たとえば、就園前の子どもをもつ家庭において、基本的信頼感の形成、しつけ、子どもの身の回りの世話、遊び、他児との交流、就業との両立など、子どもを養育する上での課題を抱える。このような多重役割を母親ひとりで果たすことはストレスになると考えられる。一方、育児期の父親は、無職で育児を担う場合、母親より葛藤をもつ（Menaghan, 1989）という結果に示されるように、他の役割と育児のバランスがとれないことは、父親にとっても葛藤を伴うのである。したがって親子関係は、現代社会の複雑性・多様性の中にあっても、家族内の実際の相互作用を通して構築されていく関係である（Giddens,1992=1995）ため、相互作用について検討する意義は大きい。

一方、Rusbult（1980、1983）の投資理論によれば、コミットメントという概念（関係関与性と訳される）は、人がある対象への関係を維持し、かつ関係に愛着を感じる傾向と定義されており、関係に資源を投入するほど、充足感が高いほど、関係への価値づけが高いほど、関係に関与する程度が高まることを説明する。これを子どもと大人の関係にあてはめてみると、親がもてる資源を子育てに投入するほど、子育ての充足感が高いほど、子育てに価値をおくほど、親子の関係性は良好になると予測できるのである。しかし、個人内要因の関連に関する理論であるために、親同士の調整までは含まれないという点で、家族内の葛藤を捉えるには限界があると考えられる。なぜなら育児期の親子関係は、ほとんどの場合、それぞれの父親、母親によって自発的にとりくまれ、矛盾や葛藤を抱えるパーソナルな営みである一方で、お互いに調整したりけん制しあうなど相互作用が生じるものと考えられるからである。

ところが、従来親子関係の研究対象としては、母子が取り上げられることが多く、父親が子どもとの関係でどのような感情をもつかに関するアプローチはほとんどなされてこなかった。国立社会保障・人口問題研究所による「第三回全国家庭動向調査」（2006）は家族生活の変化を５年ごとに全国規模で把握し、時代の変化を捉えている。たとえば、育児の 80％以上を妻が担う家庭は 20 代～ 40 代においては約 80％を占めていると報告されており、母親が育児の主体として取り上げられることが多い。1993 年には「夫も家事、育児を平等にすべきだ」と考える妻は 74％であったが 2003 年には 82.8％に増えている。反面「夫の家事や育児への参加について期待する」とする妻は 1993 年には妻の 50.8％であったが、2003 年には 41.2％に低下している。つまり、意識上では父親の家事、育児の遂行をあたりまえのことと考えるように変化したが、夫婦の相互作用を通して、夫の行動的変化に期待しにくい状況を示唆している。幼い子どもをもつ父親たちが、どのように子どもに働きかけ、何を感じ、父子関係の何に対して葛藤を感じているかを明確にすることには意義があろう。

【従来の研究と本研究の目的】

初期の父親研究では、親役割や機能について静的に捉えられていたが、Lamb（1976=1981;2004） や Pedersen（1980=1986）の研究では、父子関係の観察によってより直接的に捉える試みがなされた。たとえば相互作用のパターン、関係性の評価、相互作用による子どもへの直接・間接的効果を取り上げ、関係性そのものが研究対象として取り上げられ（Belsky, 1979, 1980;Belsky, Gilstrap, & Rovine, 1984）、特に父子関係が子どもの発達に及ぼす影響についても研究が積み重ねられた。

1990 年代以降社会学では、父親の育児関与を促進する要因について、相対的資源、時間的制約、社会規範、育児ニーズ、情緒関係、子育て環境、仕事など、親自身と親子をとりまく環境に広げて要因分析がなされた。たとえば、夫婦の性別役割分業の意識が弱い男性ほど、育児参加する傾向が見られることが明らかにされている（Coltrane & Ishii-Kuntz, 1992）。

観察による研究や要因分析によってさまざまな知見が得られたと考えられるが、親子関係においては、子どもの感情に対してどのように理解し、応答しているのかについては、当事者自身の感情、子どもの立場に自分自身を投射する能力を用いていると考えられる。また親子関係は、親子が参与する社会的文脈に関連し、社会的経験において学ばれるものと解釈することができる。つまり、父親の子どもに関する言説内容そのものを分析の対象として用いることが必要であると考えられるのである。

Lamb,Pleck,Charnov,& Levine（1985）は、父親の子どもへの関与について中心的な３側面として、engagement、accessibility、responsibility 概念を提示している。つまり、父親の子どもへの関与に関して、直接的関与のみならず、情緒的支えや役割に伴う責任感に関する概念も含めて言及している。このように Lamb ら（1985）は父親による子どもへの関与の中心的概念を提示したが、理論化をめざしてその後多くの研究が取り組まれている。この概念を用いた研究としては、Nangle, Kelley,Fals-Stewart, & Levant（2003）は、就学前の子どもをもつ共働き夫婦では、父親

の関与の3側面には、父親の属性および父親の信念（belief）が影響することを示している。一方、McBride & Rane（1998）は、父親の子どもへの関与に夫婦関係がどのように影響しているかを検討し、夫婦のパートナー性が高いほど、どの側面も高くなることを示した。またMcBride &Rane（1997）は、父親が仕事、親、配偶者の各役割に従事していると認識している程度が高いほど、父親の関与も高くなることを示している。さらにMcBride &Mills（1993）によると、3歳～5歳の子どもをもつ父親と母親を比較したところ、専業主婦家庭でも共働き家庭でも、遊ぶという相互作用においては、母親よりも父親の方が有意に長く時間をかけていることを明らかにしており、父親の子どもへのかかわりには特徴があることが示されている。

West& Zimmerman（1987）の提示したDoing Genderの概念は、家庭内での関係性について、日常の行動から作られていくプロセスとしてジェンダーを捉える。つまり、父親・母親の個人的特性の違い、暗黙の権力関係や、構造的アプローチにとらわれることなく、社会的相互関係のプロセス自体を重視する概念である。たとえば、母親が抑うつ的となる緊急事態では、父親は男性であり性差は存在するが、いったん夫婦間の性別役割分業を棚上げし、家事や育児に関する行動を積み重ね、自分なりのジェンダーアイデンティティを構築していくのである。このようにDoing Genderの概念は、そこで生じている相互関係を重視する概念として位置づけられるため、家族内の人間関係を検討する際には、有用な概念であると考えられる。

一方、Cabrera,Fitzgerald,Bradley & Roggman（2007）は、父親のライフコースを視野に入れた観点から、どのように父親になったか、父親自身がどのような父親に育てられたか－という要因を検討する必要について述べている。また親子関係に関する縦断研究では、乳児期と青年期の継続性について、愛着理論を背景としてさまざまな結果が示されている（Cabrera,Tamis-LeMonda,Bradley,Hofferth,& Lamb,2000）。たとえば、Grossmann, Grossmann, Fremmer–Bombik, Kindler,Scheurer-Englisch,& Zimmermann（2002）は、養育者に対する子どもの愛着行動と、養育者の保護行動の提供が情緒的な絆を形成し、その後の子どもの情緒安定性との間に関連をもつとする立場から、乳幼児期の親子関係と、子どもが10歳になった時の情緒安定性との関連を検討している。その結果、乳児期における母親への愛着行動が10歳時の情緒的安定性を予測すること、2歳時における父親の遊びにおける子どもへの応答性が、10歳時の情緒的安定性を予測することを明らかにしたが、2歳時の愛着行動と10歳時の情緒的安定性との継続的な関連は認められなかったとしている。つまり、親子関係における父親、母親の影響はきわめて複雑で（Thompson, 2000）、親自身の生育歴、両親が果たす機能も多様で、さらに相補性も示唆されるため、今後父親要因の詳細な検討が必要である。子どもへの関与は、直接的相互作用の時間の長さという側面ばかりでなく、全体としてみると母親より関与する時間が短くても、父親の行動の内容、たとえば、応答性、発達的適切性、情緒的支援、安心感、連携の程度、遊びにおける楽しさ、子どもと共有する程度などについて高い程度を示す可能性も考えられる。つまり父親の関与に関する概念はいくつか検討されているものの、概念相互間の関連を明らかにすることが今後の課題として残されている。

日本における父親・母親に関する比較研究は、親としての成長の違い（柏木・若松, 1994）、それぞれの影響性の違い（加藤・石井・牧野・土谷, 2002）など検討されている。田中（2006）は、NFRJ98（全国家族関係調査1998）のデータをもとに、父親・母親における子どもとの関係についてとりあげて論じており、関係良好度として満足度と関係良好度に関する総合的評価を用いて、関係の良否や親和度を測り、社会経済的属性と関係良好度との関連について分析した。永井（2004）は、妻が就労し、末子年齢が小さいなど育児のニーズが高いほど、労働時間が短いほど、夫婦で共行動が多い家庭ほど、父親の育児参加がより多くなるとし、育児ニーズ、時間的制約、情緒関係が支持されたとしている。母親へのサポートを介した間接的な影響（牧野, 1982）、夫婦関係が母子関係に及ぼす影響（数井・無藤・園田, 1996）など、従属変数として育児時間、育児行動など量をとりあげて実証的に検討されたものが多く、育児行動の頻度・時間（週のうちそれぞれの育児行動をどれ位の頻度で行なうか、何時間くらい関与するか）など、父親の変数を数量化して分析したものがほとんどである。また、加藤（2007）はRusbultの投資理論を親子関係を維持する程度に適用し、育児参加が多いほど、育児の価値づけが高いほど、親のディストレスが低いほど親子関係は良好になるという仮説をたてて、その妥当性を検討し、父子・母子関係が、育児参加度、育児への相対的価値づけ、精神的安定の3つのバランスによって規定されることを、投資理論によって説明しようと試みている。しかし父子関係について理論に基づいた研究はあまり多くない。

概観すると、(1) 父親の役割を外側から客観的に捉える研究から、子どもとの相互作用などを具体的に捉える研究や社会との関係をとりあげた研究が増えてきている。(2) 日本の父親は子どもと関わる時間が相対的に少ないとされているが、育児に関わる時間的側面と父子関係の質的側面の連関性、関与の概念間の関連についてはあまり明らかにされていない。(3) 日本の父子関係を詳細に捉えようとした探索的な研究は増えてきているが、理論に基づいたもの

が少なく、仮説を生成するにとどまっている。

Brotherson & Dollahite（1997）によれば、父親自身が語る、子どもへの関与の内容について質的分析を行った結果、子どもの利益になるように働きかけたり、責任感をもつということに関して多くが語られ、関与の内容には、子どもを支援するように計画を再構成する、子どもの関心に合わせる、子どもの要求することに対して肯定的に受けとめることが含まれていたとしている。またある父親は「家族と子どもを最優先している」と述べており、子どもにより多くの時間をあてるために、労働時間を変更したり仕事を切り上げたりするように、父親が自発的に調整することも見出されたとしている。さらに、父子関係を構築するために自ら学んだり、子どもに意味がある活動を共有する父親の言説も得られたとしている。つまり、父親の語りからは、育児の量的側面ばかりではなく、子どものニーズに適合するように工夫して相互作用する内容も引き出されているのである。

しかし、このような子どもへの関与の内容は、子どもの発達段階に応じて求められるものや重視すべきものは変化すると考えられる。たとえば、子どもの発達に合わせた養育者の存在について Winnicott（1965=1977）は、乳児期には時間的、空間的に連続性を保ち、子どもが依存できることが必要だが、幼児期には子どものニーズを読みとりながらも養育者の意図を伝え、子どもが他者の存在を意識するような相互交流が求められるとしている。つまり、子どもの自己主張によって親子間に葛藤が生じる場合、子どもの感情を読み取る必要はあるが、受容するばかりでなく限界を設定するなど、程よい対応が求められるようになるという。さらに、Sroufe（1996）は幼児期の課題として、感情を表出すること、必要なときに自分でコントロールし調整することをあげているが、この一見矛盾する課題を達成するのはなかなか難しく、親の助けが必要となる。親の対応としては、はっきりと親が介入して情動をコントロールする時期から、わからないように支えたり導く時期を経て、その後介入がなくても子ども自身がうまく情動を表出したりコントロールするようになる時期を迎えるとしている。親の課題としては、子どもがコントロールを失いそうな時には介入するが、その一方で子ども自身が自発的に方向づけできるように導くことであるという。つまり、従来の研究から明らかになっていることとして、親が子どもの情動に敏感で子ども主導的であることも必要であるが、子どもの自己コントロールの発達を考慮すると、親が適切に関係を構造化したり親の意図を伝えることも必要であるといえよう。たとえば、加藤（2008）では、2 歳児と父親との相互的なイメージ共有過程について、シンボリック相互作用論の立場から質的アプローチによって検討し、イメージ共有過程は、ことばによる相互作用ばかりでなく、ふり・まねなどのような幼児期初期の行動においても解釈することが必要であり、子どもの自己の発達にも関わることを明らかにしている。シンボリック相互作用論の立場では、関係性は、社会的、相互作用的な産物であるため、相互作用過程を捉えることが必要である（Lindesmith, Strauss, & Denzin, 1978=1981）。

従来の研究における課題として、どう子どもと関係を形成するかプロセスに関する研究の必要性があげられる。そこで本研究では、父親の子どもとの関係づくりは、父親自身の感情への気づき、子どもの気持ちや意図を感じとることによって成立すると捉え、父親の言説をもとに父子関係における感情を明らかにすることに焦点化する。父親が、子どもに直接かかわるだけでなく、母親や子どもへの影響、父子関係において何に迷い、悩み、喜びを感じながら調整しているのかについて検討する。フォーカス・グループ・インタビューを用いて、父親の子どもへの関与について、父親の語りに関する質的研究を試みる。

【方法】

1. 調査協力者

横浜市内にある親子教室[1]（週 1 回ずつ 1 年間 4 クラス開催し、各クラス約 20 組の 2 歳児とその母親のクローズドグループ）に 2008 年 4 月から翌 3 月まで 1 年間通所した 2 歳～ 3 歳の幼児をもつ父親である。親子教室開始後半年たって、父親を対象とした懇談会を各クラス 1 回ずつ実施した（2008 年 10 月）。属性を表 1 に示す。父親の平均年齢は 36.3 歳（29 ～ 48 歳）、土、日に実施したため、父親の都合によって参加人数に違いが生じている。子どもの

表 1. フォーカス・グループ・インタビューの参加者の構成

日程	父親の人数	年齢の平均	幅	男児の父親	女児の父親
10.18	15 名	35.3 歳	31 － 48 歳	4 名	11 名
10.19	21 名	36.2 歳	32 － 43 歳	11 名	10 名
10.25	18 名	36.1 歳	31 － 45 歳	12 名	6 名
10.26	21 名	37.4 歳	29 － 45 歳	12 名	9 名
	75 名	36.25 歳	29 － 48 歳	39 名	36 名

年齢は 2 歳半～ 3 歳半で平均月齢はほぼ 32 ヶ月。（教室開始時点 4 月）

2. 父親のフォーカス・グループ・インタビューの進行

フォーカス･グループ･インタビュー（Vaughn,Schumm,& Sinagub,1996）は、リラックスした雰囲気の中で、ある特定の話題に対して、率直で日常的な会話を引き出すことを目標とした討議集団と定義される。フォーカス･グループ･インタビューの結果、特定の話題に対して、参加者の理解、感情、受けとめ方、考えについて意見の広がりを引き出すことができると考えられている。

本研究の父親のグループインタビュー（約 20 名＊4 回）では、まずインタビューの進行役は、1 年間の親子教室の運営を担当する著者（2 回）ともう一人のスタッフ（2 回）が行うこととした。グループインタビューのテーマについて予め打ち合わせを行い、「父親の子どもとの関係」であることを確認し、具体的には遊び・しつけに関して、きょうだいを含めた家族内での子どもと父親との関係をとりあげるということとした。著者はいずれのインタビューにも進行役あるいは記録係（IC レコーダーへの記録管理と非言語的コミュニケーションを含めたノートに書き留める）を担当した。

インタビューでは、子どもとの関係について考えるために実施する趣旨を父親に説明し、「子どもとの関係について、日ごろ父親として考えていること」をテーマに話し合うことを参加者に提示し、父親の同意を得た上で、インタビューを実施した。インタビューでの発言を IC レコーダーに記録することについて同意を得た。構造化については、進行役によって、①インタビューのテーマを最初に父親にアナウンスする、②テーマについて挙手により、意見の交換をする。進行が滞った場合に、進行役が発言していない人に発言を促すこともあり、基本的には進行役は、流れに合わせて軌道修正し、まとめ役も務める。③時間内に父親のインタビューが進行するように援助し、父親からさまざまな意見が得られるように配慮している。インタビュー終了後に、IC レコーダーから発言順に書き起こしたものを分析対象とした。

3. リサーチ・クエスチョンの設定

発言記録を通読した上で、目的に基づき、下記のリサーチクエスチョンを設定した。

Q1. 親子関係における父親自身、子どもの気持ちの実際はどのような内容であるか。

Q2. 子どもとの関係づくりにおける父親自身の気持ち、子どもの気持ちに関する言説とその対処はどのようなプロセスで生じるものか。

4. 分析方法

データを単位化する：親子の相互作用に関する父親自身の感情、子どもの感情に関する参加者の発言を選択して、ラベルをつけて抜き出す作業を行った。

ラベルのグループ化：抜き出したデータについて背後の意味を含めて読み取り、類似性と相違性を分析に含めた上で比較し、解釈した上で概念を抽出した。その際、その概念について定義づけて命名する。

概念間の関係の検討：リサーチクエスチョンに対応した理論を得るために、共通する概念はカテゴリーにまとめていき、最終的にカテゴリー間の関係を解釈的して、父親の子どもとの関係づくりを説明する理論を構築する。ここでいう理論とは、データに根ざした、父親と 2 歳児との関係づくりの領域限定的な理論のことを意味しており、本研究で父親が語ったデータから析出された概念間の関係を明らかにすることによって、父子関係に何が起こっているかの仮説を生成することを目的としている。

【結果】

1. グループインタビューにおいて、Q1. のリサーチクエスチョンに基づき、父親自身の“気持ち”に注目し、意味のまとまりで区切り、その意味内容のまとまりに対して概念を導いた。Vaughn ら（1996）によれば参加者の視点から広範なデータが得られるという長所がある。その一部を表 2. に示す。子どもの気持ちに関して同様に概念を導き、一部を表 3. に示す。

父親自身の気持ち

1）子育てへの肯定感情

①の発言では、遊んでもらわなかったが、感謝している―と育ててもらった思いを捉えているが、一方で父親との直接的な関係にはあまり触れられていない。自分の父親は子育てについてあんまり考えてなかったと思うから、自分も父親の考えに基づき、父のようにあんまり深く考えないことで、子育てを肯定的に捉えていきたいと述べている。つまり、自らの父親のように子育てしたいという思いは伝わってくるが、消極的肯定であり、父親自身もわが子に関する相互作用については触れない。②の父親は、「とことん遊んでます・・」と遊ぶ行動につき合うことが、この父親にとって大きな意味をもつことが理解できる。③の父親では、初めは女の子であるために、苦手意識をもっていたが、子どもの世界を尊重することによって、子どもの側からみることで、育児を肯定的に捉えている。③、④、⑤の父親では、友達みたいに

共に自然の中で遊ぶことで、自分もストレスが発散できるという語りが見られた。子育てへの肯定的な感情の定義は、相互行為の肯定的イメージの表現であるが、グループにおける語りによって、父親の肯定感が子どもの側からも共有できるものと父親のみが抱くものが捉えられ、多様性が示された。

2）母子の間に入る

父子の相互関係が進まずに、迷いが表現され、①、②の父親では母子の強固なつながりに入りにくく、子どもが母親に依存していると語られている。つまり、母子の間にどう入るか―については、③の父親は「・・・ただ自我が芽生えたっていうのか、時期がくればなくなるのか、ずっと続くのかというところで・・・」というように、わが子との具体的な関係づくりについて、母親とどう調整するか、子どもの発達をどう捉えたらよいのか、という点で迷いや葛藤が表現されている。就園前の2歳児は、発達的に自己が明確になり自己主張が顕著になる時期であるが、一方で、自己調整が難しく、親による調整もかなり難しくなる時期である。したがって、母子の間に入るという概念の定義は、家族関係の調整が必要になる時

表 2. グループ・インタビューで表現される父親の気持ちの例 （番号は、各概念の文中番号と対応している）

概念 （概念名と定義づけ）		
子育てへの肯定感情		
相互行為の肯定的イメージの表現	①	親に育てられた経験をもとに子育てしようと思っているんですが、父親のイメージってあんまりないんですね。平日はいなかったし、休日は好きなことをやっていたし。そこについていくか、どうか、ってだけで。かといって私は父親に遊んでもらわなかったが、だからといって、うらみ辛みがあるわけではない。えーっ感謝してる部分もありますんで。うちの父親も同じような感じであんまり考えてなかったと思うんですが、同じような感じで。やってけばいいかな、と。だからあんまり深く考えていないですね。
	②	私は徹底的に遊ぶってことで。疲れて寝たら私の勝ちだってくらいに（遊ぶ）。で今はとことん遊んでます
	③	僕もはじめは子どもができた時に、男がよかった。自分の趣味が多いんで、趣味が共有できる。で、実際出てきた時には、ええっと思った。でもそれは完全にこちら側の思い込みだった。子どもに対する接し方も、僕も男きょうだいだったんで、女の子に対してどう接してよいかどうしようかーと思ったが、接し方もこちらでハードルを設けてしまう。子どもの側からすれば、父親であっても母親であっても変わらない。子どもの側に枠があるとすれば、時間の差。一時的なもの。その時の気分もあるし。その時だけは思ってしまう―だから、子どもを育てていく上で、気をつけることはないように思う。自分の考えを押し付けない。子どもの世界に僕らが入っていかなくてはいけない。自分の考え方を押し付けるのではなくて・・・
	④	土日はフルに遊んで、友達みたいに遊ぶことで、（自分も）ストレスが発散できる
	⑤	けっこう子どもと遊んでいて、遊ぶのは好き
母子の間に入る		
母・子の主体的な調整	①	なかなか子どもと母親の間に入れない
	②	下が生まれてからは何かあると、「ママ、ママだけ」という。眠かったり生活の根本的な部分になると、家内だよりにどうしてもなる。なりがち。そうなると、自分に何ができるのかって申し訳ない気持ちでいっぱいになる
	③	「ママとママと」っていうんで、それがただ自我が芽生えたっていうのか、その辺がわからなくってどうしたいのかわからないし、こっちもどうしたらよいかわからないっていうのが出てきたかな、と。ただこういうのが、時期がくればなくなるのか、ずっと続くのかというところで、どうしたらよいのかって思う
母親を見ていて心配		
コミュニケーションのずれと母子距離の近さ、母親のイライラ	①	母親の方が子どもと離れられない。べったりしているがもっと自分の世界が在るように協力したいと考えているが、母親が子どもにべたべたしていることが心配。
	②	だいぶ（母親は）イライラしているのがわかるが、どうやって解消したらいいのか
	③	妻も不安定、どうしたらよいのか
	④	（母親が）イライラのせいで、なんでもないことでも子どもに叱ったりしていることが、それが自分から見てあまりよくないかな、と思う
	⑤	ママが大変なんで、なるべくサポートしたいなって。精神的なケアを皆さんやっていらして、すごいなあと思って。やっぱりどうしても、精神的なものって難しくってどうしたらいいかなって思う。どうしても物理的に家事を手伝う、育児を手伝うのはできる。どうやって、というのがはっきりしている。でも嫁さんのケアをするのが、むこうにすれば、「こうしてほしい」って言うのがあるみたいなんだけど、なかなか 10 歳離れているし、育った環境も違うし、考え方も違うし、なかなか一致しない。で、そういうことがあると、余計にストレスがたまっちゃう。自分で何がしたいかを言ってくれればいいんだけれど、何やりたいんだかわからないときに、言い合いになってしまって、子どもとの会話の取り方とか。そのコミュニケーションは・・・？大人がボンといっちゃうと、シュンとしちゃう。どういうふうに怒ればよいのかな。と

に、家族の中で父親がどのように存在感を位置づけることができか、父親による母・子の主体的な調整を示している。

3）母親を見ていて心配

①父親が述べているように、「母親の方が子どもと離れられない。べったりしている・・・」と母子の距離の近すぎを危惧していたり、③、④の父親が述べているように「母親がイライラのせいで、なんでもないことでも子どもに叱ったりして、自分から見てあまりよくないと思う」と怒りを子どもにぶつけている実態に直面して、どうふるまえばよいか、態度を決めあぐねている父親の様子が浮かんでくる。⑤の父親は、「・・・（夫婦の）年が離れているし、育った環境も違うし、考え方も違うし、なかなか一致しない。で、そういうことがあると、余計にストレスがたまっちゃう。・・・何やりたいんだかわからないときに、言い合いになってしまって・・・」と夫婦でのコミュニケーションのとりにくさや意思の疎通の難しさを語り、母親への心配はコミュニケーションのずれと母子距離の近すぎ、母親のイライラであると定義される。

4）子どもに合わせる

①の父親は、親の側の余裕が必要と判断している。②の父親は、同性か異性かが影響し異性には苦手意識をもっていることに触れている。③の父親は「無理に合わせようとすると、疲れてしまう」と述べて、「子どもが自分に向かってきてくれると、こちらとしてはそれに付き合っていればいい」と効力感が述べられている。しかし④では「引き離すと余計に泣いて、いつもかわいそうになっちゃって、甘すぎることも・・・」と述べている。子どもに合わせるは、余裕をもって、引き離す―甘えさせるなどの加減に対して適切な距離を保てること、つまり子どもの主体性を尊重するが父親自身の感情も受容できることと定義する。

5）自己コントロール

①の父親がきょうだい関係、子どもの性別によって複雑な対応が求められること、②、④、⑤の父親は手が出てしまうことを後悔し、叱る方略が乏しいことに関連し、⑥では母親と同時に叱ってはいけないと述べており、⑦の父親は、他の親の方針と異なっていても、よその子は叱りにくい・・など語る。自己コントロールの定義は、叱る際の子どもに効力のある方略の多様さ、親同士の連携と自分自身の感情調整である。

6）親役割、子どもの発達

①の父親は「耐えること」と表現したり、②ではサポートがなく、「二人で子育てしなくてはならない」など責任を伴う親役割意識と定義される。子どもの発達では、①では迷子になること、②では幼稚園でやっていけるか、子どもの実態から見た発達に対する漠然とした不安と定義する。

子どもの気持ち

1）機嫌が悪い時の子どもの気持ちの解釈

①の父親の発言は、この時期の子どもは機嫌が悪いこともあると捉え、「口答えするっていうか、（自分が）理由を言っても通用しない、泣くだけ・・・」という発言や、②の父親は「（親とは逆に）子どもは行きたくないと言う・・・」、④の父親は「逆を言って困らせる」、③の父親は赤ちゃん返りを「・・ちゃんと反応するんだ、こいつ」など、子どもの機嫌の悪い理由を発達や状況からも十分理解すると定義される。一方で、⑤の父親は「パパくさい」と言われたことで、ますます女児である第２子に苦手意識をもってしまい、それ以上理解や解釈することが難しいという対極例が表現されている。

2）切り替えのできなさ（方略の乏しさ）

①の父親のように、しつけの効果があると思って叩いても「ケロッとして」うまくいかないことから、子どもの感情は、切り替える方法を考えるきっかけになっている。子どもを叩いても効果がないのを見て、①の父親は「叩くのは自分の感情コントロールできないからだ」と反対に自分のことを反省するように語っている。②の父親は「（目の前に今は）いない方の親に来たがるっていうか、（親とは逆の反応に）・・・葛藤している」と語り、③の父親は「上の子と（違うことをすればいいのに）同じことをしたがるっていうか、上の子が遊んでいるのを見ると、遊んでしまう・・」と、子どもにルールを教えようとしても意図がなかなか伝わらない２歳児に歯がゆさを感じているが、かといって多様な方略を試しているわけでもない父親の姿が浮かびあがる。つまり、子どもの感情に巻き込まれて、機嫌の悪さを切り替えられないことと定義する。

3）子どもの自己主張に対して親の意向を納得させる工夫

①の父親では、子どもが言うことをきかない時に「外へ出す」が、そのことで子どもは「怒られていることがわかる」と語り、その理由として、「わが子は父親と母親のことを好きだから」（外に出されることが）いけないことをしたから外へ出されたと気づくと述べ、②、③、④の父親からは、発達的に難しい時期であるからこそ、どう対処するか、子どもに合わせて調整している場面が具体的に語られる。子どもの難しさも、発達的に見ると成長に向かっている－という手ごたえを得ている②のような父親もいる。子どもの自己主張に対し、どう納得させるかに関する知恵と定義する。

4）子どもの難しさと母親への依存への対処

①、②の父親は、子どもの母親への依存心や自己主張の弱さをキャッチし心配しているが、その場面で自分はどう介入していいか－迷いも表現される。②では、きょうだいができたことで赤ちゃん返りをしたり、③の父親は、子どもが「ママ、ママ」と呼んで、自分と関わろうとせず、発達的なものなのか、それともずっと続くのか－と表現する。これは、子どもの人見知りと母子関係に関する不安と定義する。

5）子どもの楽しさの理解

①の父親は、兄と同じことをしたがる子どもの様子を目に浮かぶように語り、子どもの振舞いを楽しんでいる様子が見えてくる。②の父親は、自分も遊びの中で子どもに伝えられることを模索している様子が語られる。③の父親は、本来遊びは楽しいはずなのにと子どもの思いを代弁した上で、なかなか楽しさを共有できない母親への不満が語られる。④の父親は、はじめ母親が出かける時に子どもは泣くけれども、(行ってしまうと）案外ケロッ

表 3. グループ・インタビューで父親が表現する子どもの気持ちの例 （番号は文中と一致）

概念（概念名と定義）		
機嫌の悪い時の子どもの気持ちの解釈		
子どもの機嫌の悪い理由を発達や状況からも十分理解する	①	3歳くらいの子は口答えするっていうか。お父さんが理由を言っても通用しない。怒っても片付けなさいといっても、泣くだけ
	②	家にいるのが好き・・・車に乗って外に行こうというと、子どもは行きたくないという
	③	赤ん坊生まれて、上の子今三歳なんですけど、あんなに、成長していたのに、(下の子が生まれて）後退するんだってことを目の当たりに見て、赤ちゃん返りって本当にあるんだって。すごかったのが、下の子が生まれて退院して帰ってきた日に 40 度熱出して、「ちゃんと反応するんだ、こいつって。」
	④	・・・パパは「イヤ」って感じで。たまにその時間に帰れなかったりすると、今度はママの方に、「パパと（お風呂に）入りたい」とか言って困らせる。逆に言ったりする
	⑤	上が男の子でしょ小学生の男の子がいるんですけど、まあ自分が男なんで男の時には男同士、自分と子どもとの関係づくりはそんなに苦労しなかった。というか、自然と一緒に遊べた記憶があるけれども、娘だと・・・。父親と娘の関係づくりがちょっとわかんないところがあって。娘は3歳なんで、休みの時なんか、「パパくさい」とか言う時、「パパ大好き」と言う時も（あって)。息子の時には、自分が子どもの時そうだったから、こうやったら面白いんだろうな、と経験からわかるが、女の子って遊び方が違うって・・・
切り替え方略の多様さ		
機嫌の悪さを切り替えられない	①	一方的に叱る・僕自身も親から手を出されて、子どもに手が出ちゃう、それをコントロールするのは難しい。(子どもは）たたいてもけろっとしている。あまり叩いても通じなくなったんだなあ。叩くのは自分の感情をコントロールできないからだ、と思って・・・
	②	そう、気まぐれ。なんか、いない人に来たがるっていう面が出てきて、そういう面で葛藤している。
	③	上が年長で、下が3歳。みてると、下がなんでも上の子と同じことをしたがるんですね。ご飯食べてても（上の子が）遊んでれば、途中でもご飯やめて、遊んじゃう。
自己主張行動への対処		
子どもの自己主張に対しどう納得させるかに関する知恵	①	うちは二人同時には怒らない。なんで怒られているかを理解できることを怒るんですが、二人同時に親の4つの目から3歳の子を怒ると、子どもがもう萎縮しちゃう。というのがわかる。親に対して言いたいこともいえなくなっちゃう。その時は忘れちゃっても、それを毎日一ヶ月、何年と続けていくと、何年かたった時に、言いたいこともいえないとなっちゃうといけないから、と妻と話して、二人同時には叱らないことに・・・
	②	本人のためを思って言っている事は間違っていないので、（やめない時に）外に出される。そうなっても本人は父親、母親のことが好きなので、怒られているのがわかるようだ。理解できないが、危険なことは叱って。兄、姉の物をとりに行った時（くれないと兄､姉を）叩いてしまう。とその叩いた手が悪いんだ､と子どもの手を叩く。外に出すとわかるようだが､また同じことを繰り返す。むずかしい年齢でこの時期特有の難しさ・・・・
	③	公園なんかに行って、滑り台なんかも順番を守りなさいとか、あと友達が使ってるから、終わったら取りなさい、とか。そういう中で、お兄ちゃんやお姉ちゃんとかが、おしのけていっちゃったり、おもちゃをよこどりしていっちゃう時の、理解はできないんですよね。(わが子には）「並びなさい」「待ちなさい」と教えていて、子どもが､「なんで、お兄ちゃん私のとって行っちゃうの?」とか、滑り台でも「あのお兄ちゃんは並んでいるのに、なぜ行っちゃうの？」とか。同じくらいの子でも横取りして､「今､・・・ちゃんが遊んでいるんだけど」といっても、バーっと取っていっちゃうと、娘も理解できない。当然、取っていった子どもの親も（その場に）いる。そこで、他人の子を怒れないじゃないですか？こっちの親は怒んない人もいて､(反対に）叩いて戻す親とかもいて。うちは順番を守らない時、怒るし、人のを取った時は怒る。当然怒られた方は、やな気持ち。そういうとこはちゃんとしたいんだけど。ただ子どもはなかなか理解できない。取られたこととか､横は入りされたこととか､夜になるとずっと覚えていて､言うんですよ。「なんであのお兄ちゃんは取って行っちゃったの?」って。子どもなりにすごいストレスじゃないかな？

④	娘に関して言うと自我が目覚めて、「一人で、一人でやりたい」と（やってもらったことを）元に戻して、またやろうとする。そういうの見ていると、確実に成長しているのかーと思う。駄々こねて動かないこともあるが、自分で物事考えてやれるようになっていくかな、と。下の子はやっと歩けるようになったんで、けっこう動きますけど。
⑤	なんで怒られたか、理由を聞いて、「わかっている？」と確かめる。毎回繰り返して、理由がわかれば納得できる。親が悪いときには反対に子どもに謝って・・・。
⑥	女の子を女性と考えると、女性は理由を求める。わかっているだろう理解しているだろう、ということを前提としないで、（大人に近いと考えて）ことばに置き換えて、話すようにしている。本人がなんかやりたいことやって（それがいけないことなら）叱るということと、（たまたま）事故というような面では叱らない。やりたいことやって悪いときには叱るが、事故的なことには叱らない。極力話を聞くようにしている。自分の父親が話を聞いてくれる人だったと伝わるようにしたい。叱ると逆に引きずってしまうので、後で聞き役になっている。だから、「何で怒られたの？」その（叱られた）きっかけは、何がしかたったから（なの）か？と（子どもに）追求する
⑦	上の子は結構物を持っていたりするんで、それに下の子が興味をもつと、それを取って、使ってたりすると、結構上が真剣に怒ったりする。なかなか難しい。私からすると、上はもう４年生なんで、いろいろ我慢するっていうのを入れたいんですよ。

としている子どもの様子を捉えている。⑤の父親は、子どもが父親とイメージを共有しながら遊ぶ様子を語る。子どもの楽しさを理解できることと定義する。

6）人間関係の調整

①の父親は、子どものこだわりについて触れ、思い入れがあるからけんかもやむを得ないと述べる。②の父親は、娘二人と母親のけんかが始まると、自分の出る幕ではない、と激しさについて語る、きょうだい、母親を含めた家族関係の調整と定義する。

2. 子どもとの関係づくりにおける父親自身・子どもの気持ちとその対処

Q2.のリサーチクエスチョンに基づき、父親自身と子どもの気持ちとその対処について、概念間の関連について検討した。グループでは自発的な発言を促すために、父親同士の相互作用を通し、より広範なまとまった言説が現れ、発言が次の発言を生み出すような連鎖的反応をもたらした。表２から、親役割、（父親の）自己コントロール、母親を見ていて心配、子育ての肯定感情など、子どもを育てる際の親としての責任感とも言える抽象概念の概念群がカテゴリーとして存在すると考えられる。つまり、いずれも「子どもとの関係づくり」における父親自身の感情を伴い、父親自身の生育歴に関する言説を含み、母親との調整や他児の親との調整も含んでいた。「・・ねばならない」「耐える」という表現が見られるように、大人として子どもを養育する役割について語られている。第二に実際の子どもとの直接的相互作用で父親が感じている側面、つまり母子の間に入る、子どもの引っ込み思案・母親への依存、母親・きょうだい関係の調整、子どもの発達の理解という家族内の相互作用の積み重ねから生じる感情が述べられている。第三に、表３においては子どもの気持ちを支える側面、具体的には子どもに合わせる、機嫌が悪い時の子どもの気持ちの解釈、子どもの気持ちに対して切り替える方略、子どもに納得させる、子どもの楽しさの理解という父子関係を維持するような、子どもとの情緒的な関係に関する言説が得られており、大きくこの３つにまとめられるものと考えられる。

【考察】

まず第一に、グループインタビューの中で、父親が語る子どもとの関係づくりに関する父親の感情に注目したところ、父親は豊かな感情表現を用いて、家庭内における父親－子ども－母親との相互関係を表現していることが明らかになった。本研究では、子どもとの関係づくりにおいて、父親たちが家庭の中で子どもとどのような相互交渉を担い、何を感じているか、明らかにすることが目的であったが、「親であることによって耐える時間が多い」など、親役割や自己コントロールを自覚する父親の語りがみられた。２歳児をもつ父親は、Umberson & Gove（1989）が述べているように、親として責任感を感じていることが明らかにされ、Lamb ら（1985）が提示している、親としての責任、responsibility に関連する概念が導き出されたと考えられる。

第二に父親自身の感情としては、子どもの発達をめぐって展開する子どもの困った行動が、発達による一過性のものなのか、それとも継続していくものなのか、といった迷いや悩み、親として母親との調整・コミュニケーションのあり方がうまくいかないとする語り、母子密着の中に父親としてどう入っていくか、母親と相互調整する際に、子どもの発達をどう捉えたらよいのか、というとまどいが背景にあることが示唆された。さらに、育てられた自分自身の父親には遊んでもらわなかったが、父親モデルとしては受容されており、消極的な肯定ともいえる語りが見られた。

このことが父親として現実的に対処しなくてはならない場面において、具体的なロールモデルがないために、そこで迷ったり悩んでしまう原因とも考えられる。ある父親の語りにあったように、子どもが女児であるとわかって、はじめは苦手意識をもっていたが、その後子どもの世界を尊重することによって､育児を肯定的に捉えることができたり、子どもと遊ぶと、自分もストレスが発散できるという表現が見られた。当初はジェンダーによる抵抗感をもつ父親は多いものの、わが子と向き合い、相互関係を積み重ねることによって、「子どもの世界を尊重する・・・」と述べられているように、子どもとの関係づくりに伴う行動を積み重ね（Doing Gender, West& Zimmerman)、相互関係によって苦手意識は変えうるものと捉えられるのである。

子育てへの肯定的な感情には、父親個人レベルで肯定してはいるが子どもとは共有されないものと、相互関係を通して親子双方が享受する肯定感情があることが示唆されたが、父親の感情が豊かに表現されるのは、子どもとの直接的な相互作用を通した体験の積み重ねであり、これはLamb ら（1985）が提示している、直接的相互作用、engagement に該当する側面であることが推測される。

第三に､父親が語る子どもの感情に関する表現としては、子どもが引っ込み思案であるなど子どもの難しさ、母親に依存していることに対処するとまどいが背景にあることが示唆される。つまり、子どもの感情面において父親としての迷いや葛藤が表現され、子どもの発達的理解や家族関係における調整が必要になっていることがわかる。つまり、育児期の父親は、母親との競合や調和を模索しながら、子どもの感情を捉えられるようになると推測されるのである。

第四に、子どもが機嫌が悪い時、その理由を読み取れることや、子どもの発達や状況に合わせた対応ができるようになりたいと思っているが、その対応が適切であって、子どもに対して効力がもてることが大切であろう。また「叱る」という場面を通して語られていたように、子どもに対して多様な方略を持っていることや、それを実際に発揮して、使えること、手ごたえが感じられるためには、父親自身の自己コントロールも必要であろう。つまり、子どもの気持ちに気づき、発達に応じた理解が可能になること、その裏づけがあって、わが子の自己主張行動に合わせた、柔軟な対処や具体的な行動につながることが示唆された。つまり、Lamb ら（1985）が提示している、子どもへのAccessibility と重なり、子どもに対応した関係づくりが達成されるものと捉えられる。

最後に育児期の父親が子どもへの関係づくりを促進する要因を導きだすという課題について、本研究で得られた概念によって検討してみる。関係づくりとは、子どもの機嫌の悪さを発達や状況から十分理解でき、機嫌の悪さを切り替えられないという葛藤に向き合い、子どもの自己主張に対しどう納得させるか知恵を絞るという一方で、子どもの楽しさを理解できることが示され、Sroufe が提示した、子どもの情緒発達を促進するような親としての援助が十分にできると捉えることが可能と考えられる。それをもとに投資理論にあてはめてみると、親としての責任を強く感じるほど、父親が子どもとの直接的相互関係を積み重ね（母親との調整も含む）るほど、子どもとの関係づくりが促進されると予測できる（図 1.)。一方本研究の限界として、仮説としての理論は導き出されたが、分析の妥当性を検討することは今後の課題として残されている。父親が語る子どもと関係づくりの難しさは、責任感、子どもとのかかわりを促進することによって達成されるのかについて、理論の適用可能性は検討すべきである。しかし父親が母子の間に入る、子どもの母親への依存、ジェンダー抵抗の概念が質的分析によって明らかにされ、今後、父親の育児参加を検討する際に、父親要因のみならず、家族内の矛盾や葛藤が存在すること、母親との競合や調整を検討する必要性が明らかにされたことの意義は大きいと考えられる。

（注）

1　親子教室は 1 年間 4 クラス開催し、各クラス約 20 組の 2 歳児とその母親が週 1 回のペースで通うクローズドグループ。平常は母子が通い、親子遊び、親のための懇談会やテーマに基づいた学習、子どもの自由遊びを行う。年間 3 回ほど父親

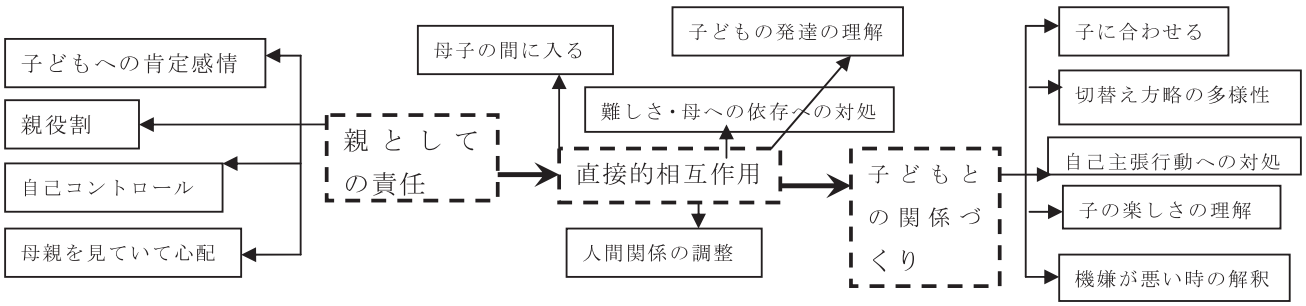


図 1. 子どもとの関係づくりに関して父親の語りから抽出された概念

を対象とする。

（文献）

Amato,P.R.,& Rievera,F.,1999,Paternal Involvement and children's behavior,Journal of Marriage and the Family,Vol.61:375-384

Belsky,J.,1979,"Mother-Father-Infant Interaction:A Naturalistic observational study,"Developmental Psychology,15:601-607.

Belsky,J.,1980,Pedersen,F.A.Eds..The Father-Infant Relationship, Praeger.（依田明監訳, 1986,『父子関係の心理学』新曜社）.

Belsky,J.,Gilstrap,B.& Rovine,M.,1984,"The Pennsylvania Infant and Family Deve -lopment Project,1:Stability and Change in Mother-Infant and Father-Infant Interaction in a Family Setting at One,Three,and Nine Months,"Child Development 55 :692-705

ベネッセ教育研究開発センター, 2006,『第３回ベネッセ幼児の生活アンケート報告書』.

Brotherson&Dollahite,1997,'Generative ingenuity in fatherwork with young children with special needs',In Hawkins,A.J.,& Dollahite,D.C.(eds.),Generative Fathering:Beyond deficit perspectives,Sage.Pp89-104.

Cabrera,N.J.,Fitzgerald,H.E.,Bradley,R.H.,&Roggman,L.,2007,Modeling the Dynamics of Paternal Influences on Children over the Life Course,Applied development Science,Vol.11,No.4;185-189

Cabrera,N.J.,Tamis-LeMonda,C.S.,Bradley,R.H.,Hofferth,S., &Lamb,M.E.,2000,Fatherhood in the 21st century,Child Development,Vol.71,No.1:127-136.

Coltrane,S.&Ishii-Kuntz,M.,1992,"Men's Housework:A Life Course Perspective",Journal of marriage and the family,Vol.54,No.1: 43-57.

DeHart,G.B.,Sroufe,L.A.,&Cooper,R.G.(eds.),2003,Child Development:Its nature and Course,fifth ed.N.Y.:McGraw Hill.

Giddens,A.,1992,The transformation of Intimacy:Sexuality,Love and Eroticism in Modern Societies,Polity Press.松尾精文・松川昭子訳, 1995, 親密性の変容－近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム, 東京：而立書房.

Grossmann,K.,Grossmann,K.E.,Fremmer-Bombik,E.,Kindler,H., Scheuerer-Englisch,H.,Zimmermann,P.,2002,Social Development, Vol.11,No.3:307-331.

Ishii-Kuntz,M.,2004,Fathers' Involvement and School-Aged Children's Sociability:A Comparison between Japan and the United States,Japanese Journal of Family Sociology,Vol.16,No.1 :83-93.

石井クンツ昌子, 2009, 父親の役割と子育て参加―その現状と規定要因 , 家族への影響について, 季刊　家計経済研究, 81 号：16-23

柏木惠子・若松素子, 1994,「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5.72-83.

加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子, 1998,「父親の育児参加を規定する要因－どのような条件が父親の育児参加を進めるのか」, 家庭教育研究所紀要, 20 号.：38-47.

加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子, 2002, 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が３歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる２つのコホート比較から, 発達心理学研究 , Vol.13, No.1：30-41.

加藤邦子, 2007, 父親, 母親が子どもへのコミットメントを維持する要因, 家族社会学研究, 第 19 巻２号：7-19

加藤邦子, 2008, 父子相互のふり遊びにおけるイメージ共有過程の質的分析：シンボリック相互作用論の立場から, 人間文化創成科学論叢, 第 11 巻：477-487

数井みゆき・無藤隆・園田菜摘, 1996, 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について, 発達心理学研究, Vol.13, No.1：31-40

国立社会保障・人口問題研究所, 2006,「第三回全国家庭動向調査」

Lamb,M.E.,1976,"The Role of The Father In Child Development". N.J.:John Wiley Sons.（久米稔, 服部広子, 小関賢, 三島正英訳, 1981,『父親の役割：乳幼児の発達とかかわり』：家政教育社.）

Lamb,M.E.,(ed.),2004,The Role of the Father in Child Development,Fourth edition,N.J.:John Wiley Sons.

Lamb,M.E.,Pleck,J.H.,Charnov,E.L.,&Levine,J.A.,1985,Paternal behavior in humans,American Zoologist,Vol.25:883-894.

Lindesmith,A.R.,Strauss,A.L.&Denzin,N.K.,1978,Social Psychology 5th edition,Holt,Rinehart and Winston, 船津　衛訳, 1981, 社会心理学―シンボリック相互作用論の展開―, 恒星社厚生閣

牧野カツコ. 1982, 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安, 家庭教育研究所紀要, 3 号. 34-56.

McBride,B.A.,&Mills,G.A.,1993,Comparison of mother and father involvement with their preschool age children, Early Childhood Research Quarterly,Vol 8(4),:457-477.

McBride,B.A.,&Rane,T.R.,1997,Role identity,role investments,and paternal involvement:Implications for parenting programs for men,Early Childhood Research Quarterly,Vol 12(2),173-197.

McBride,B.A.,&Rane,T.R.,1998,Parenting alliance as a predictor of father involvement: An exploratory study.Family Relations, Vol 47(3),229-236.

Menaghan,E.G.,1989,Role Changes and Psychological Well-Being: Variations in Effects by Gender and Role Reportoire,Social Forces,Vol.67:693-714.

中野由美子, 1992, ３歳児の発達と父子関係, 家庭教育研究所紀要, 14 号：124-129.

永井暁子, 2004, " 男性の育児参加 ", 現代家族の構造と変容：全国家族調査［NFRJ98］による計量分析, 渡辺秀樹, 稲葉昭英, 嶋崎尚子編, 東京：東京大学出版会

Nangle,Suzanne M.,Kelley,Michelle L.,Fals-Stewart,William,& Levant,Ronald F.,2003,Work and Family Variables as Related to Paternal Engagement,Responsibility,and Accessibility in Dual-Earner Couples with Young Children.Fathering,Vol 1,No.1 :pp.71-90.

大日向雅美, 2001, 子育ての背景, 子ども虐待への取り組み, 別冊発達 26, 京都：ミネルヴァ書房, ：p118-126.

Pedersen,F.A.(ed.),1980,"The Father-Infant Relationship".: Praeger.（依田明監訳 ,『父子関係の心理学』, 1986, ：新曜社）

Rusbult,C.E.,1980,"Commitment and satisfaction in romantic associations:A Test of the Investment Model.",Journal of Experimental Social Psychology,Vol.16,:172-186.

Rusbult,C.E.,1983,"A Longitudinal Test of the Investment Model: The development(and Deterioration)of Satisfaction and Commitment in Heterosexual Involvements.",Journal of Personality and Social Psychology,Vol.45(1),:101-117.

Sroufe,L.A.1996.Emotional Development:The organization of emotional life in the early years.Cambridge University Press.: 151-171.

Tamis-LeMonda,C.S.,1999,Perspectives on Father Involvement: Research and Policy,SOCIAL POLICY REPORT,Volume XIII, Number 2

田中慶子, 2006, 実親との関係良好度評価―NFRJ98-03 の比較澤口恵一, 神原文子編第 2 回家族についての全国調査（NFRJ03）第 2 次報告書 No. 2.：親子, きょうだい, サポートネットワーク日本家族社会学会・全国家族調査委員会, 89-100.

Thompson,R.A.,2000,The Legacy of Early Attachments,Child Development,Vol.71,No.1:145-152.

Umberson,D.&Gove,W.R.,1989,Parenthood and Psychological Well-Being:Theory,Measurement,and Stage in the Family Life Course,Journal of Family Issues,Vol.10:440-462.

Vaughn,S.,Schumm,J.S.,&Sinagub,J.M.,1996,Focus Group Interviews in Education and Psychology,Thousand Oaks,CA: Sage, 井下理監訳, 1999, グループ・インタビューの技法, 慶應義塾大学出版会

West,C.,&Zimmerman,Don,H.,1987,Doing Gender,Gender&Society, Vol.1,No.2,:125-151.

Winnicott,D.W.,1965,The maturational Processes and the Facilitating Environment,London; 牛島定信訳, 1977, 情緒発達の精神分析理論, 東京：岩崎学術出版

Japanese Fathers' Commitment to Their Two-Year-Old Children: Qualitative Analysis Using Focus Group Interviews

Kuniko KATO
(Interdisciplinary Gender Studies)

The purpose of this study was to explore how fathers felt committed to their two-year-old children, and how fathers interpreted their children's assertive behaviors. This was accomplished by examining what fathers said during the focus group interviews. Rusbult (1980, 1983) defined commitment as "the tendency to maintain a relationship with and feel psychologically attached to someone." Commitment to their children means that an individual's commitment to maintain a relationship is predicted by a combination of factors such as the person's satisfaction with the relationship, how much the individual has invested in the relationships, and how much individuals value the relationships. Data were collected from four group interviews (the total of 75 fathers), during which the fathers discussed how they built their relationships with their children.

The data were analyzed by three stages, labeling concepts, choosing the categories, and coming up with three categories. Inductive analyses were used during this process. As a result of this analysis, three categories were extracted : responsibility, engagement, and commitment. Feelings of "responsibility" originate from the positive feelings of fathers, worrying about the mothers' excessively close relationships with their children, fathers' self-regulation, and fathering roles. "Engagement" originates from supporting and cutting into the close relationships between the mothers and their children, how fathers respond to their children's difficult behaviors and dependency on their mothers, and how well fathers interpret and understand their children's development. "Commitment" originates from meeting their children's needs, preparing their children to deal with their assertive behaviors, having fun with their children, using poor strategies to cope with their children's difficult behavior, and how well fathers interpret the reasons why their children are sometimes bad mood. In conclusion, it was found that the adjustment of the relationships among fathers, mothers, and children are included in the process of fathers building relationships with their children. This finding suggests that fathers' feeling of "responsibility" for and fathers' engaging with their children help prevent father-mother conflicts, and thus can increase the amount of commitment fathers feel to their children.

Keywords: fathers, two-year-old children, qualitative analysis, Rusbult's investment model, focus group interviews